

氏名	小野田 裕 士
学位(専攻分野)	博 士(医 学)
学位授与番号	博 乙 第 2602 号
学位授与の日付	平成 5 年 6 月 30 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 4 条第 2 項該当)
学位論文題目	甲状腺腫瘍の核 DNA 量と生物学的悪性度に関する研究 —甲状腺分化癌を中心にフローサイトメトリーによる解析—
論文審査委員	教授 折田 薫三 教授 赤木 忠厚 教授 太田 善介

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

甲状腺分化癌の核 DNA 量と生物学的悪性度の関連を知る目的で、濾胞腺腫11例、乳頭癌42例、濾胞癌18例、未分化癌 6 例、髓様癌 3 例のパラフィン包埋組織を用いて Flow cytometry (FCM) により核 DNA 量を測定し、臨床病理学的諸因子、予後との関連を検討した。

その結果、臨床病理学的諸因子のうち ploidy pattern あるいは増殖期細胞の割合との間に一定の関連を認められたのは組織型と年齢のみであり、性別、腫瘍の進行度との間には一定に関連は認められなかった。一方、予後との関係では、aneuploidy 群は diploidy 群より明らかに生存率が低かった。さらに予後による 3 群間での検討でも、早期死亡群は、無再発生存群、再発生存群と比べ有意に aneuploidy の出現率が高く、増殖期細胞の割合も高い傾向を示した。

以上より、甲状腺分化癌において ploidy pattern 及び増殖期細胞の割合は、従来の病理組織学的な腫瘍の進行度とは異なり、腫瘍自体の生物学的悪性度と密接に関連した指標となる可能性が示唆された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究者は、甲状腺癌の核 DNA 量と生物学的悪性度の関連を知る目的で、甲状腺分化癌を中心に80症例の各種甲状腺癌の核 DNA 量を flow cytometry (FCM) で測定し、臨床病理学的諸因子及び予後との関連を検討している。早期死亡群は長期生存率に比べ有意

に aneuploidy 及び S' tG₂M の増殖期細胞の比率が高いこと、未分化癌は全例 aneuploidy であることなど、FCM の応用が甲状腺癌の悪性度を知る上で有用なことを明らかとしている。臨床上極めて重要な知見であり、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。